

2024年7月7日聖霊降臨後第7主日説教

エゼキエル書2章1-7節

コリントの信徒への手紙二12章2-10節

マルコによる福音書6章1-6節

7月に入り急に猛暑日が続く気候となりました。皆さまどうぞ体調、ことに熱中症にはお気を付けください。

さて、本日の旧約日課のエゼキエル書は、預言者エゼキエルの召命の個所です。小見出しでは、「預言者の召命と任務」となっています。エゼキエル書は、預言書ですが、黙示文学的な不思議な描写も多く、エゼキエルの召命も、彼が幻の中で不思議な生物を見た後に起こります。

召命は「主は私に言われた。「人の子よ、自分の足で立ちなさい。私はあなたに語ろう。」」（エゼ2:1）という部分から始まります。以前の新共同訳では最初の部分が「彼はわたしに言われた」となっていました。それは原典の通りなのですが、エゼキエルに語りかける「彼」が誰であるか不明確でした。新しい訳では、「主」と補って訳しています。エゼキエルに預言を語れと命じるのが、主なる神様であることを明確にするためでしょう。

エゼキエルが語ることを命じられている対象は、イスラエルの民です。しかし、「主は言われた。『人の子よ、私はあなたをイスラエルの子ら、すなわち、私に逆らう反逆の国民に遣わす。彼らもその先祖も私に背き、今日に至っている』（エゼ2:3）とある通り、彼らは主なる神様から離れてしまっている状況でした。エゼキエルの預言者としての活動は、1章1節に「第三十年の第四の月の五日に、私がケバル川（バビロンにある運河）のほとりで捕囚の民と共にいたとき、天が開かれ、私は神の幻を見た」とある通り、イスラエルのユダ王国が滅亡し、彼自身がバビロン捕囚の中にいる時でした。つまり、王国が滅亡した民に、主なる神様に立ち返ることを呼び掛けることになるのです。そのような状況で、民が快く耳を傾けるとは限りません。それゆえ、「人の子よ、あなたは彼らを恐れてはならない。その言葉を恐れてはならない。たとえあなたが、いらくさと棘の中にも、また、さそりの上に座すとしても。彼らが反逆の家だからといって、その言葉を恐れてはならない。彼らの前におののいてはならない。彼らが聞こうと、反逆の家ゆえに拒もうと、私の言葉を語らなければならない。」（エゼ2:6-7）と命じられます。預言者の使命は、苦悩を伴う事柄なのです。

本日の使徒書に苦悩という言葉はありませんが、そこでも使徒パウロの苦悩が示されています。パウロの苦悩のものは、自分が設立した教会で、パウロが本当の使徒であるかどうか疑われたということです。パウロは復活前のイエス様に直接会ったことがありません。直接教えを受けたことがないのです。また、教会の迫害者でもありました。復活のイエス様に会い大転換をしたのですが、イエス様を実際に知らないということは、マイナスの要素として残り続けたのでしょうか。なぜ、そのマイナス要素が特に問題となったのか。おそらく、コリントの教会がある程度順調に活動し始めると、イエス様に会ったことがある人たちが教会を訪れたのでしょうか。そしてイエス様の思い出を語り、コリントの教会

の人々もその内容に魅了されたのでしょう。それはある意味では人間的に仕方がないことです。現代のわたしたちでも、イエス様がどういう方であるかを知りたいという望みはあります。また、彼らは自分たちが使徒であるという手紙（推薦書）も持っていました。それらは、パウロにはないものでした。

本日の箇所ではパウロは、天に引き上げられ、樂園まで到達した人に言及し、その人のことを誇りますが、「このような人のことを私は誇りましょう。しかし、**私自身については、弱さ以外は誇るつもりはありません**」（2コリ 12：5）とある通り、パウロには「弱さ」以外に誇れるものはないのでした。律法学者であった時のパウロは、知識と誇りに満ち溢れていましたが、使徒となったパウロには、この弱さ以外誇れるものがなかったのです。しかし、だからこそパウロは、イエス様に出会ったことがないにもかかわらず、イエス様のご生涯を通して示された大切な福音を、しっかりと認識することができたのでした。そして「**ところが主は、『私の恵みはあなたに十分である。力は弱さの中で完全に現れるのだ』と言われました。だから、キリストの力が私に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。**」（2コリ 12：9）と語ることができたのでした。そして、そうであるからこそ、パウロは、十字架という弱さにこそ救いがあるという福音を、だれよりも強く宣べ伝えることができたのです。

自分ではどうにもできないような様々な弱さ、しかしそれを超えて主なる神様から与えられる使命、それらから生じる苦悩、イエス様もその中で苦しまれた方でした。本日の福音書は、イエス様の弱さに関することを間接的に示しています。ガリラヤで活動されたイエス様は、すでに様々な評判を生んでいましたが、古郷ナザレの人々の反応は「**この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで私たちと一緒に住んでいるではないか。**」こうして、人々はイエスにつまずいた。（マルコ 6：3）というものでした。そもそもガリラヤは、エルサレム神殿があるユダヤに比べれば、低く見られます。さらに、その中でもナザレは、『聖書（旧約・続編）』には登場しない無名の村です。さらに、イエス様はその無名の村の中でも、「**マリアの息子**」と呼ばれるくらい、低く見られていた方でした。イエス様ご自身が、主なる神様以外に誇るものが何もない方であったのです。

パウロは「**それゆえ、私は、弱さ、侮辱、困窮、迫害、行き詰まりの中にあっても、キリストのために喜んでいます。なぜなら、私は、弱いときにこそ強いからです**」（2コリ 2：10）と語ります。世界的な混乱の中で、まだ平和の中にいるわたしたちは、平和の中にいるからこそ、この言葉をしっかりと受け止めることができないかもしれません。もちろん、一見平和な日本でも、これだけ大変なことはあると見つけ出すこと、気づくことも大切です。しかし、平和の中にあっても、まことの希望は、十字架という苦しみと、復活という出来事を通して示されることを信じていきたいと思えます。ナザレという自分の故郷でイエス様は苦悩を経験され、十字架の上で、もっとひどい形で苦しみを体験された。だからこそイエス様は復活された。そこに救いがある。そのことを一緒に確認していきたいと思えます。そこから、勝ち取ることを通して得られるのではない、まことの平和を示していきたいと思えます。